

会津藩燃ゆ 第三部

歴史ドキュメント

しも きた だい ち
下北の大地

— 会津藩士広沢安任の生涯 —
ひろさわやすと

星 亮一

教育書籍

会津藩燃ゆ第三部

歴史ドキュメント

しもきた
下北の大地
だいち

—会津藩上広沢安任の生涯—
ひろさわやすとう

星 亮一

教育書籍

ほし
りよういち
星 亮一

一九三五年仙台市生まれ。

東北大学文学部国史学科卒。

現在、福島中央テレビ報道制作局

長、東北史学会会員。

著書『白虎隊という名の青春』

『仙台藩帰らざる戦士たち』『会津

藩燃ゆ』『続会津藩燃ゆ 白虎隊

燎原に死す』『王城の守護職』『箱

館戦争』『長崎海軍伝習所』『会津

白虎隊』『新選組副長土方歳三』

他がある。

—会津藩燃ゆ 第三部—

下北の大地

—会津藩士広沢安任の生涯—

一九八九年十二月三十日初版第一刷発行

●著 者 星 亮 一

●発行者 堤 慎 一

●発行所 教育書籍株式会社

東京都新宿区高田馬場

一―二八―六 一六九

電話 〇三(二〇五)〇〇二七

印刷／明和印刷 製本／渋谷文泉閣

※定価はカバー・帯に表示してあります。

※乱丁・落丁本はおとりかえいたしません。

目次

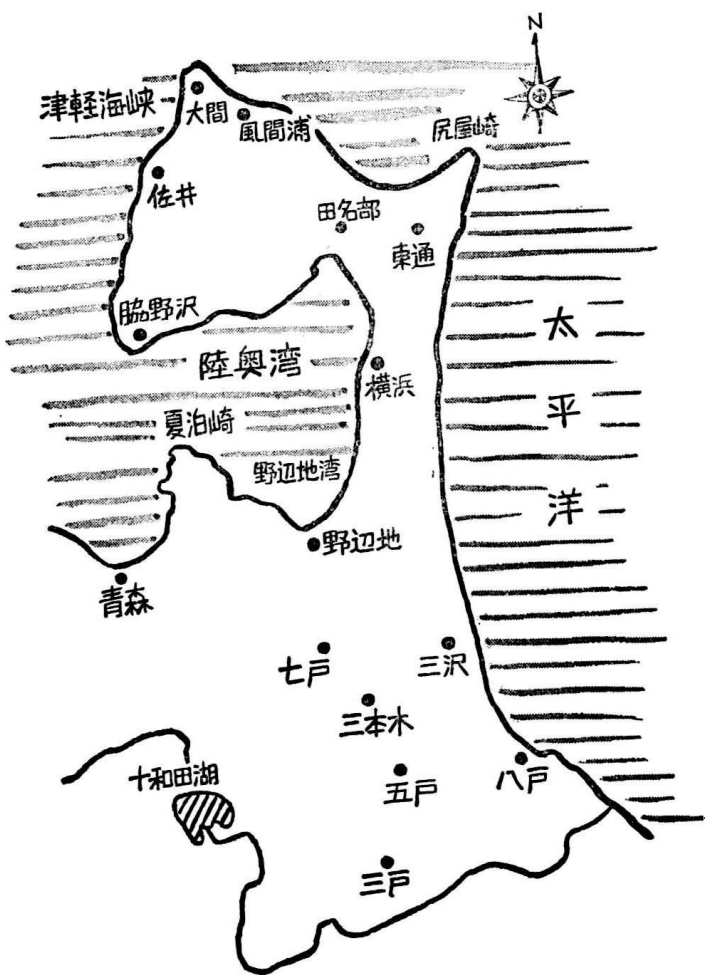
外輪蒸気船	5
三つの家族	24
人材	40
四季おりおり	59
ゲダカ	78
遠大な理想	92
開墾	108
別離	127
木崎の牧	146
開牧社	160
青森・小樽・浅虫	174
碧眼の仕事師	191
夕陽	205
帝巡幸	218
落日	235
資料 斗南藩職員録	253
あとがき	259

さし絵

小池
修

会津藩燃ゆ 第三部

下北の大地



下北半島

外輪蒸気船

一

潮風が心地よい。

昨夜までの雨が上がり、上空は紺碧、遠くに白雲。出航にはまたとない日和である。

明治三年（一八七〇）四月！。

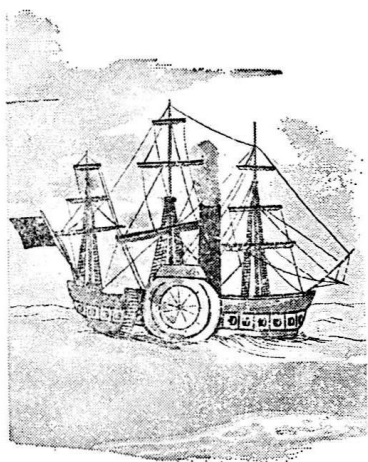
東京品川の波止場へ、旧会津藩関係者で賑わっていた。

二百人ほどの旧会津藩士が、手に手に荷物を持ち、舩で沖の蒸気船に乗り込んでいる。

一団を率いる広沢富次郎は、幕末時、会津藩公用方の重臣として活躍、薩長にも知られた人物である。

傍らに居るのは、広沢を補佐する永岡敬次郎である。

永岡は、戊辰戦争のとき、仙台にいた。



奥羽越列藩同盟の参謀として、仙台に常駐した永岡は、奥羽越を中心とする北部政權の誕生を夢見た。

薩長政府に対する、奥羽越の政權である。しかし、戦いは空しく敗れ、会津藩は三千余人の犠牲者をだし、薩長に屈服した。

敗れたとはいえ、会津藩兵の戦いは見事であつた。三万とも、五万ともいう敵の大軍に包囲された会津の人々は、老若男女も含め、死を決して戦つた。

京都守護職として、中央に君臨した会津の誇りが、彼らを最後まで戦わせた。

あれから、まる二年の歳月が流れた。

会津降人こうじんとさげすまれ、捕らわれの身にある旧会津藩士の名譽を回復し、生計の途を立てたい、旧会津藩首腦の悲願は、この一点にあつた。

その悲願がかない、旧南部藩の地に三万石の土地が与えられたのである。

合わせて北海道の太櫓たぐら、歌棄かす、瀬棚せな、山越やまこしの四郡の支配を命ぜられた。

その第一便の出航である。北海道への移住希望者がこの春、出航しているので、第二便といえなくもないが、お家再興の中心はあくまで陸奥むつの国。この船が第一便といつてよかつた。

「広沢さん、よろしくお願いする。永岡さん、六月には私も参ります」

旧家老の山川大藏おおくらが二人の手を握つた。

思えば、主君松平容保かたもりが京都守護職を拜命、激動の京都に着任が決まつたとき、先発隊に選ば

れたのは広沢だった。

師の秋月悌次郎とともに京都に先行し、会津藩兵受け入れの準備に当たったことを、想いだした。

—あのときは、結果として敗れたが、今度こそ会津武士の意地を見せねばならぬ。

広沢は責任の重さに身を震わせた。

見送りの人々は、山川大蔵を筆頭に、同じ旧家老の梶原平馬、内藤介右衛門、参謀の水島純、野口九郎太夫、小出鉄之助など在京の重臣たちである。

引き続き東京に留まり、勉学を続ける山川健次郎、柴四朗、高嶺秀夫といった少年たちの姿もあった。

広沢と永岡が先行し、残る重臣たちが会津に戻って家族をまとめ、海路、陸路、陸奥の地に向かうのである。

やがて別れのときが来た。

広沢と永岡は手を振って舢に乗り、沖の本船に移った。

本船は八百トンほどのアメリカの貨物船で、船長は赤銅色をした鼻の高いアメリカ人。水夫は中国人だった。

蒸気船の多くはすでにスクリュイ型だったが、このオンボロの貨物船は、両舷に大きな外輪があり、バシヤ、バシヤと音を立てて、ゆっくり走るのである。

品川を出帆したのは四月十七日。この頃はまだ旧曆なので、いまでいうと、五月十七日にあたる。

太平洋は見渡す限り蒼一色で、頬にあたる風も心地よく、二百人ほどの旧会津藩士は、長い幽閉生活から解放され、笑みを浮かべて船旅を満喫した。

しかし、それもほんの束の間で、波が高くなるにつれて船は前後左右に激しく揺れ、藩士たちは甲板のあちこちで、ゲーゲー吐き、後は狭い船室で、死人のように横たわった。

皆、腰に両刀を差した、武勇の誉れ高い武士たちだが、船酔いには勝てない。

文明開化の世の中、ザン切り頭が増えたが、この一団に限っては、鬘が多く、会津藩のかたくなさを見せつけた。

船長室の隣にある士官室で、広沢は地図を広げていた。

「すべては天候次第。予定の三日で着くことを祈る」

広沢は呟いた。

行先は奥州八戸である。ここで降りて、三戸さんのかへに向かう。南部藩に代わって一時、この地を治めた黒羽藩くろはねから領地の引き継ぎを受け、五戸、野辺地を経て、下北半島の田名部たなべに向かうのである。

広沢は鉞まさかりのような形をしている下北半島を、改めて見つめた。下北半島の突端は大間岬おおまである。ここからは北海道の箱館が、目と鼻の先である。

「永岡君、いろいろと夢が描ける」

広沢は傍らの永岡敬次郎に話しかけた。

その時、船がグラリと傾き、机のグラスが床に落ちて砕けた。

「ひどい揺れだ」

広沢は立ち上がった。

甲板に出ると、品川の空は、蒼天だったが、いつの間にか、真っ黒い雲が矢のように走り、巨浪が船べりを叩いていた。

白いあわを立てながら外輪が悲鳴をあげ、煙突からは、黒煙がもうもうとあがり、必死に浪と戦っていた。

広沢は恐ろしい形相の海を見つめながら、これからのことをあれこれ想った。

思えば、苦難の日々であった。

戊辰戦争の発端となった鳥羽伏見の戦いに敗れ、江戸に戻った広沢は、必死に平和の道を探った。

会津藩は抗戦一色であり、若い家老梶原平馬を中心に主戦派が藩内をリードした。しかし、できれば戦いを避けたい、と広沢は考えた。

理由はいくつかあった。

一つには、薩長の巨大な軍事力である。

幕府を倒し、意気あがる薩長の軍事力に対抗することは、困難であった。

軍事費の調達、兵の養成、どれをとっても一朝一夕にできるものではない。海軍力がないことも、会津にとって不利だった。

軍事物資、兵員の輸送は、海に頼る時代になっている。軍艦一艘ない会津藩が、薩長に立ち向かう事は無謀に思えた。

二つには、日本人同志の争いは避けるべきだ、とする民族意識である。内乱に乗じて外国が攻め寄せることもある。

江戸でこうした政治工作に当たったのは、広沢の他に外島機兵衛、柏崎才一、浮洲七郎、小出鉄之助、南寅次郎、水島純といった人々だった。

広沢は幕臣の大久保忠寛、勝海舟に頼んで西郷隆盛を説得しようと試みた。勝の斡旋で最初に薩摩の益満休之助まさみつしゅうのすけに会った。

「益満さん、皆さんは我々を会賊かいぞくと呼び、戦いを仕掛けておる。徳川家も静岡に帰ることになった。もはや我々と戦いなどする必要はないでしょう」

益満は、かつて江戸で大暴れし、鳥羽伏見の戦いを引き起こした仕掛け人である。

「貴殿とは知らぬ仲ではない。西郷によく話をしておこう」

益満は極めて好意的で、広沢が持参した嘆願書を受け取ってくれた。

数日後、益満から呼び出しがあり、

「会津のことだが、徳川家の解決に目鼻がついたので、次は会津のことを解決することになった。

あなたの藩も良くなるだろう。西郷がそういつていた」

という。そして、西郷との会見日を伝えてくれた。

広沢は小躍りし、会津出身で幕府に仕えている林三郎と一緒に西郷を訪ねた。ところがで来たのは西郷ではなく、海江田武次^{かえだ}だった。

海江田とも旧知の仲であり、京都で何度か酒食をともにしている。

「広沢さん、貴殿の嘆願書は朝廷に伝達しました」

と、丁寧な応接だった。しかし、真偽のほどは分からない。そのうちに関東で戦いが始まった。会津藩兵も戦いに加わっている。

和平工作は難しくなり始めた。あとは直談判^{じかだんぱん}するしかない。

広沢は単身、江戸の大総督府に乗り込んだ。薩長軍参謀西郷隆盛に面談を申し入れ、肚を割って話そうとした。

しかし、西郷は姿を見せず、着剣した兵士に有無をいわさず捕らえられ、獄舎に押し込まれた。だから会津戦争を知らない。

江戸の獄舎で人づてに会津の悲報を聞き、日夜、慙愧^{ざんき}の涙を流し続けた。

——ともに戦いたかった。

広沢は大総督府に乗り込んだことを後悔した。

だが、そのことが戦後の会津藩を救う上で役立った。広沢は明治新政府の高官西郷隆盛や大久

保利通に直談判し、会津藩再興を訴えることができたからである。

一一

明治新政府から会津藩再興の沙汰があったのは前年（明治二年）の九月で、陸奥の地に三万石を与える、というものだった。現在の青森県の三戸さんのかへ、上北かみきた、下北しもきたの三郡と岩手県の金田きんたいち一周辺である。

会津在住の藩士たちは、この知らせに仰天した。

一時、猪苗代という声もあった。ここならばかつての領地であり、会津若松の玄関に当たる。なにがなんでも猪苗代をと主張した。

広沢はあえて陸奥を選んだ。

選んだというよりは、半ば強制であり、会津側から希望を述べる状況ではない。

「猪苗代？ なにをほざく」

薩長サイドからそうした声があがっていた。

広沢は文久二年（一八六二）、ロシアとの外交交渉に当たる幕末の使節粕谷筑後守かすやちくこのかみの随員として下北半島を通り、箱館に渡ったことがあった。

そのときに見た見た広大な原野が脳裡のうりにあった。

海のない会津にとって、陸奥湾は魅力であり、国際都市箱館に近いことも夢を描く材料になった。

当時、北海道への渡航は下北半島を経由するコースが一般的で、広沢も下北半島の北端、大間おおま岬から船出した。

これを決める最後の重臣会議は、両派激論のあまり、抜刀する騒ぎになった。

会津から駆け付けたのは旧家老の原田対馬と町野主水もんどら数名である。

町野は槍を取ったら右に出る者がいない、といわれた武勇の人。山川の意見にも、広沢の説得にも頑として屈しない。

「我々は腹を斬っても、陸奥行きを阻止する。どう申されても聞く耳は持たぬ」と、開きなおった。

東京側の出席者は山川大蔵、広沢富次郎、永岡敬次郎と小出鉄之助である。

黙っていた永岡がやおら、

「町野君、君の主張は無茶苦茶だ」

と、怒鳴った。

もともと激情家の町野である。憤然と色をなし、

「無茶苦茶とはなんだ」と立ち上がった。

「無茶だから無茶だ。下北の地は広沢殿が実地に調べて、旧藩士を收容するのに十分なり、とい

われる土地だ。君は見もしないで、なぜ反対するのだ」

もはや論争ではない。喧嘩である。

双方、腰に刀を帯びている。原田対馬が町野を押え、広沢が永岡を押え、この場は収まったが、会議のあと町野の宿舎に永岡が訪ね、再び激論になった。

永岡としては、町野とじっくり話し合うつもりだったが、町野は激昂しており、
「なにしに來た。顔も見たくないっ」

と、拔刀して斬り掛かった。

永岡も刀を抜き、宿舎は騒然となった。

周りの人々が割って入り、ことなきを得たが、拔刀は、重大な罪である。

二人は厳しい叱責を受け、会議もご破算になり、猪苗代説は消えた。

広沢は、猪苗代には一万余千人の藩士と家族は收容しきれないこと、薩長にその考えのないこと等をあげ、陸奥移住を決めたのだった。

新しい藩名は斗南となんと名づけられた。

中国の詩文「北斗以南ほくと以南なん皆帝州」から採ったもので、本州最はての地であっても、ともに北斗七星を仰ぐ皇国の民である、という意味が込められていた。

そして藩を代表する大参事に山川大蔵、小参事に広沢富次郎、永岡敬次郎、倉沢平治右衛門が選ばれた。